鑑倉武鑑

二篇 三

和書門
二七九九三號 類
八七函 四架 八冊

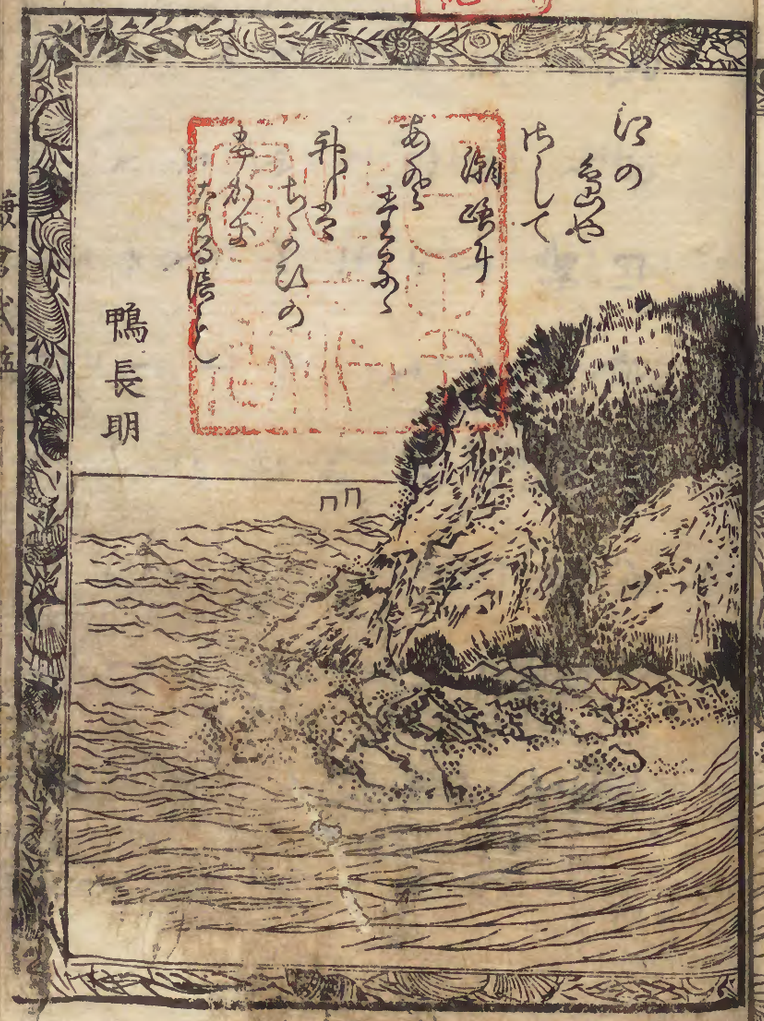
内閣文庫
和書
二七九九三號 類
八冊
一五一函 一九架

内閣文庫
番號 和 27993
冊數 8 (7)
函號 151 249

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

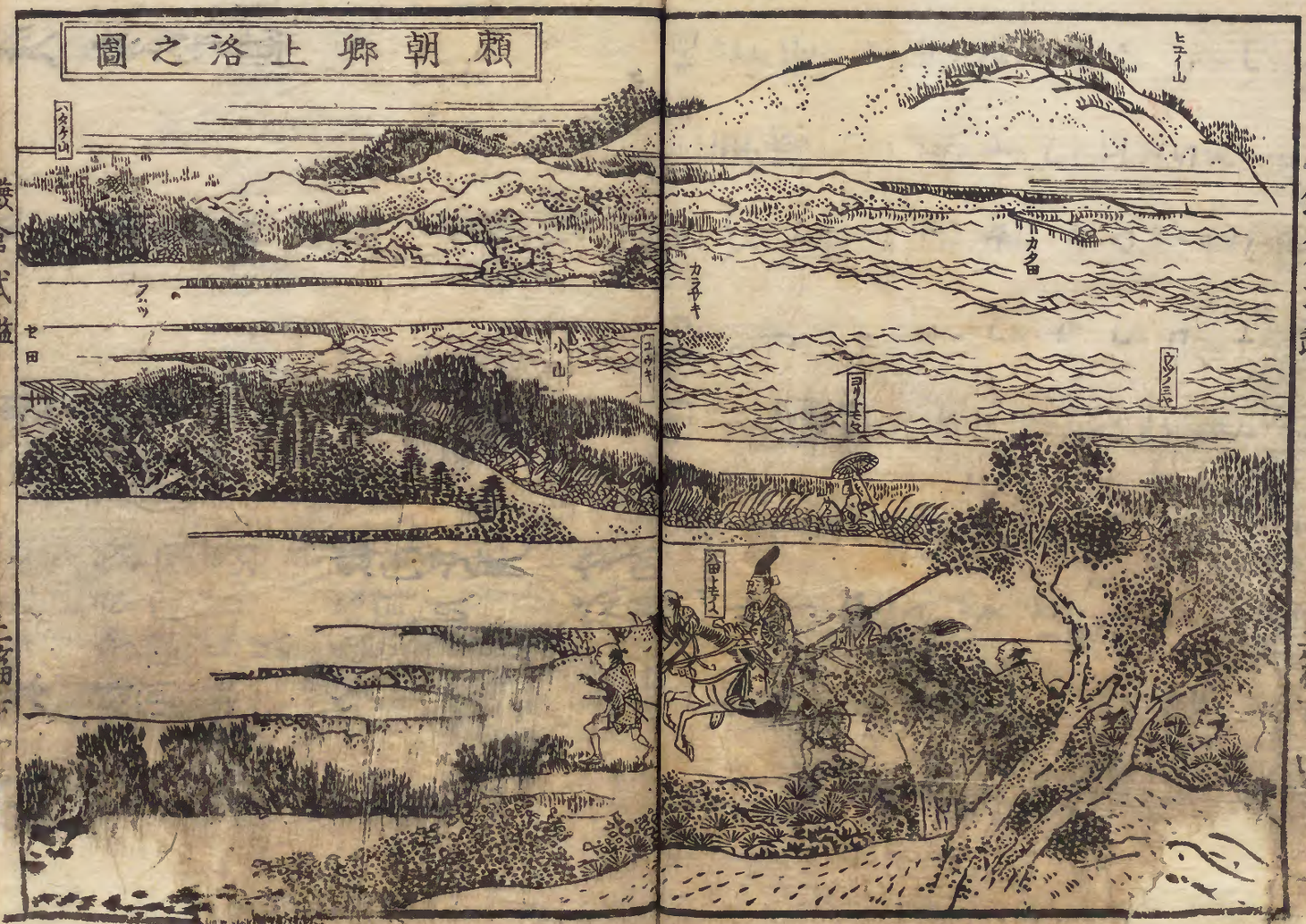
国立公文書館
National Archives of Japan

中橋本幸
水戸
大倉氏
蔵書記



鴨長明

国立公文書館
National Archives of Japan


頼朝卿上洛之圖
八ケ山
ヒエイ山
カタ田
カラサキ
ヨリトモ
ウジノミヤ
八田トモツネ
小山
ユウキ
七田

熊谷

桓武天皇十三代熊谷三郎太夫
直貞男
平直實　熊谷二郎
　直家　小二郎
　直國　平内　左兵門尉
　直時　二郎　安藝守護

熊谷二郎直實

武藏

実は桓武天皇十二
平[illegible]方という人勅勘を蒙りて武蔵
の國へ配流せらるる[illegible]方其時二男
なりける児を具して同国熊谷村に住
小沢[illegible]という者の許へ[illegible]児
[illegible]もして二郎直[illegible]と呼ばれ成人[illegible]
二つの[illegible]まむ[illegible]男[illegible]直[illegible]十八[illegible]
直実[illegible]なり[illegible]武義[illegible]小[illegible]の[illegible]
[illegible]して十騎三十騎の人[illegible]賞を給びて[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

不安事なれば仏神の道理にのべつくる事あるべきなり
とぞ仰せられける　北条よりはじめて大ぜいの武士ども我一番にと
走りかけ給ふ　新田殿の者共郎等ども
ふるい　とぞ仰せられける　とぞ申されて　法然上人の
ありがたき事共　法師と申す　一向専修の御仏事　武士道
ぶりの重れ　迎接の曼陀羅　前よりもけなげ
道ぶりの　ふるい　ふるい　ふるい　ふるい　ふるい
ふるいする男のことなれば　法師ばかりの
いふ事をきいて　西の方へ　如来のおはしまさぬ
と　とぞ　とぞ

法師ばかりも　のめやさすらん　西ふむひて　後ろ
と　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ

新開

新開荒二郎忠氏
相模

肥前国實平二男
平忠氏　新開荒二郎
　　└ 業重　二郎

忠氏又實平と云よ彼後の名の
なり太郎殿〜石橋山の戦中に
敗北して山へ落のゝ時八重姫
と云女房也忠氏も共一人
殺して山別とゝ云のまゝ
ゝ後者我兄弟後世の
あひて病をかゝる

二の宮

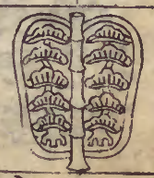
二宮七郎朝忠
相模

平良義五代山辺禅師頼尊卑
中村座主宗平三男

平友平　└ 二宮四郎
　　└ 朝忠　七郎
　　└ 光忠　小太郎

朝忠ハ上肥宮平ゞ弁也彼後義公の
ゝ兄と云よ宮方ゝ手ゝ功のり
ち肥ハ一族ゝ　所領推名神保貞
甲根垣生角三郎岩肥保あゞ皆
中村座主宗平ゝり出ゝ二宮ハ世ゝ出列二宮ハ後
てゝ孫出ゝと

兒王庄



武蔵

本庄太郎家長

鎌足公十二代中関白道隆公八代
藤原廣高　庄権守
　　└ 家長　本庄太郎
　　└ 廣善　四方田三郎

家長の又廣ゝるハ庄権守と
兒玉黨の祖ゝ平家退ゝの時ゝ

廣末　牧西四郎

頼家　庄小太郎

家次　本庄三郎　左兵衛尉

定綱　二郎

朝次　新左兵衛尉

時次　左兵衛尉

義経の為に不忠に一の合戦に功あり
家を捨て重忠が領家なり
埼玉郡富田埼川の西富野四方田
牧郷なり
一族小武蔵守村上源氏
蔵の出の産人　京都の産　加藤
右幕下に従ひ奉り二男則家と云ふ兄弟一族
所方の侍所の別当行の方へ参りて
と云へり行の移りて奥州と称す孫繁業と

富田庄

鑓足公十二代中関白道隆公六代
藤原家行　河内守

家廣　庄小太夫
家遠　塩谷五郎
近家　富田三郎

富田三郎近家

紀伊

近家も兄丸堂と家行の長男なり
廣いの庄の嫡流なり本庄と称す
近家は大力無双にして坂東より其
名を聞く和田義盛が従叔なり
して因人にありて強盗人なる義にて近家は大力と
石一其力の有り様は見あるべしと云へども大きなる弓
の角の長さ四尺七寸余あり弓二本出来れり
異りて彼角二本を一つに振り中より二つに折
実朝公に献ぜられ給ふ列座の大小名衆

感ぜしめ給ふ所なりてその罪科赦免ありて紀伊の國にて一所懸命の地をとり給ふ家も君恩を感じて各二の忠臣となりて子孫を繁昌せり

安保丹

宣化天皇第一皇子上殖葉皇子御子多治見王苗裔秩父丹五基房三代丹三太夫恒房男

丹治實平　安保刑部丞

- 實光　二郎

安保刑部丞實平

武藏

多治見王の后流中納言縣守より六代家義といへる人延喜の帝の時大和の國添田の庄司の孫嫡孫武延始めて東國へ下り武義の忠加地の庄司にて丹の姓を名乗り後實平の時

飯田

河内守頼信三男陸奥守頼清八代孫頼基男

源家義

- 義基　太郎
- 義清　二郎

飯田太郎家義

信濃

右幕下の御追討の軍功ありしかば安保の所の地頭となり給ふ是より安保と稱し義久合戦の時宇治にて討死せしかば實光も平家追討の忠ありの蒲冠の者にて功あり

家義石橋山軍の時は大庭景能の使にて敵と戰ひ給ふ敵の中へ入り忠義あり後田次郎氏の一人

香川　鎌倉

鎮守府将軍良茂五代村岡小五郎
忠通三代權五郎景政五代

相模

香川五郎經高

平經高　鎌倉五郎　号香川

- 經景　三郎
- 義景　四郎

[illegible]

宇佐美　伊東

工藤祐經弟
藤原祐茂　宇佐美三郎　左衛門尉
祐政　三郎　左衛門尉
祐時　与一　左衛門尉

宇佐美左衛門尉祐茂
伊豆

工藤

参議乙麻呂七代遠江守為憲
六代庄司景隆長子
藤原景光　工藤庄司

行光　小二郎
祐光　三郎
朝光　五郎
重光　六郎
長光　中務丞

工藤荘司景光
駿河

[illegible]

[illegible]

[illegible]

肥満して不自由せしふ什倹約を除てそのうるおひもうべ
我いこゝゆて何宮せん汝等八幡の方へも身を忠び佐殿の仕立
正成殿の安後殿の太刀と下殿と宇治殿と拾ひ給ふく
多ふ多成とりて山成城人といふもんども義光殿とおら
げかく同言よりまぢゝべ敵云ゝびまりてみるところもふ
大死せん早ゝの紀ゝとて自害して失ゝりくるゝ見ふ今八
せんゝゝゝ迷言よりせ甲州の武田よ身と高てそのち
富士川の市陣へぞゆりくる親光八要列合戦よ義朝が弟
等俣の義八といふる要殿守一の大方と但ゝしが我い
つれしうゝれば義八ゝゝふ計死と義八ゝ八ゝ工義行光付
とりぬ私光ゝよ親ゝ物ゝゝよ但ゝゝゝる義八の軍ゝゝ
一方のちるゝりゝ光ゝゝゝる佐八出陣の別当と今ゝゝれ

肥前の玉成のゝりゝ宰少武とゝる義光殿よ修て志成
愛ゝゝと死ゝて忠義と金ゝと三浦大介が一門成州ゝて
義宗の城ふ死ゝゝと同ゝかゝるゝくの右幕ゝふ宮ゝるふ
ゝりて平ゝ成一時ふ立ゝ紙逼捕使とゝりゝゝる宣戦

河野の

孝昭天皇王子伊予皇子九代
越智宝純右衛三嶋四郎親清男
越智通清　河野新太夫

通信　四郎
通孝　五郎
通富　六郎

河野四郎通信

伊豫

通信の妻祖伊予皇子尚関ふ河野ゝ
越智ゝ弘ゝ紙ゝ成ゝ妹成紙と
ゝの支ゝゝ世一代月成玉紙とゝの月玉
風早弘成ゝの郷ゝ住ゝて氏ゝと

その後義仲与市ありて南方より信濃の内なる女を
かたらひて一子を設くこの男子を仲ありて家に養ひ
三位の中将義仲と共に多くの男子新宮頼朝と源氏の
深くれば平家と不和にして合戦し南方の腹なる
弟なる教経弟知盛に攻落されて紅葉の頃二月の
さもよかりして付て嫡子に中通信の高義なる
島ありて殘りなくして平家を繁へうして平家滅亡
のことあらぬぎの列へらる右幕下かく河内守動功の
大いなる故なり伊与の中納人三十二人中獲の海法
とくぐして通信ありてもの儀とあり山猿討取の
ありの見くり其勢ひ世に知られる系越系覺を一族又
多くち居得能と見て義仲平家滅亡平家物語有るべし

十八家あり

野木

足田
齋藤

利仁将軍五代帯刀長為信四代
滝口基親長子
藤原基貞　野木左衛門尉

時基　二郎　左衛門尉
時貞　三郎
重基　押垂十郎

野木左衛門尉基貞

武蔵

利仁の四代伊博の末裔なる信濃の
道の押領使なる二男の系なる
則光と号す人なり秋葉と
氏とする信濃の足田秋葉と
河合秋葉と号す孫の
武
平基の基貞又なり基貞の足田の嫡流
義の出野木左衛門尉基貞

平家退付の所領の面々列立あるべく候へ共、奉員これ
つゝむ事なき二篇、時長ゝ代家よりおいて高位すゝ
つち左衛門尉くちのひ左衛門尉ひろ孫おなじく
同よりゝ行田四郎時長ゝ代揚名元為もゝ代左衛門
尉以前とゝろあり其時長小松の内大臣殿の
ゝて内裏の御所ふるされうその比の中宮の御
女ゝて小松の内大臣殿姉ゝ御ゝ
ゝつゝひありその折くい時長をつゝむ中ゝのけゝ
横笛しらゝ女あしがゝのゝひまより時長をゝ
ゝゝまくもゝひこゞを出るのかけに、のけわゝとゝ
ゝゝゝ神の石のかゝゝまもなくゝゝ袖のつゝ
のゝゝ代ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おゝゝる時長もゝゝふつゝゝゝゝゝゝゝゝ人間ゝのゝゝゝ
ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

て行ゐ給せんおのれがゝひ入るものとむうんとさとれば父の
命よそむくまじきこゝろざしの若者なりそもそも浮世
といふもまこと実の道よいんとて十四にしる第一番
家の出家源の勇なる往生院といつよりひ給ひてゆ
る横笛ゆゑ往人世て我とこそ捨のゝらめかゝりおも
つるこのうらめさよさこひ世をそむくこともたゞやく
と和尚のゝたる人ゝ心づよくもあるとたゞよ切てうとこそ
ゆく或夕つゝこと新出て源氏の方へでおもむきる時二月
の十日のまりゆゝ家さもさうりて梅津の里乃夕風
も名ゆゝ哀ひおりて大井川のあの色も月ゆゝさびて
わびゝけるゝ平家ゝ世ゝ哀ゝ世ゝ物ゝ哀ゝ
くゝ哀ゝ哀ゝ哀

そるまでのうつくしみ　うども　梓弓はるのこもちふいるぞ
うるはしく　紅葉笛吳　とうんて
そるとても　のうつくしうこんあつさ弓ひきとぶむべさこそ
ちるもいとおしとかいりしてその後　天平ことしの冬よさ　紅
へろうが　紅葉ぞ　こうらいてあるしが　紅葉へてやでうの　仕さ
せうとぞ

相良

左大臣武智麻呂四男乙麻呂
後亂遠江守維兼八代大膳亮
頼繁男
藤原長頼

相良三郎

相良三郎長頼

遠江

もと和が祖を名乗る維兼天暦の比
任ぜられて　あるいは　芦の維

頼忠　佐原六郎
頼細　相良小藤太
頼之　高橋左近将監

和もせさをなりて　為ふ
ゆり吳ようて　家ふ　維和
の代　後を和　寛元ゆ　西八条
為新ふ　ひて　新院の　ふへ
芦ふ　附邑へ　高倉院の　小蔵よ　候ぞ　もろ和
も和ふ　孫　会反ふ　仕へ　功あり　鳥ふ　重忠が　付よ　ふむ
て　ちさふ　勇　とあ　代　芦ふ　孫　孫　会
ふ　仕へ

高橋

相良長頼　勇

高橋左近将監頼之

参河

藤原頼之　高橋左近将監

- 頼季　弥三郎　左近将監
- 頼重　内田三郎
- 頼明　富永庄司二郎
- 頼氏　荒木弥三郎
- 頼村　上村四郎
- 為頼　八郎
- 為貞　九郎
- 頼永　犬童九郎左二門
- 頼春　高橋孫三郎

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan